加茂谷中学校　人権通信

To Forward
～前に向かって～

加中人権スローガン
「気づき・考え・行動する」
めざす学校像
「希望と笑顔あふれる楽しい学校」

２０２３年５月２日

新年度が始まって，早１カ月が経ちます。２・３年生は新学期の緊張が少しほぐれて新学年に慣れてきたころだと思います。１年生は全く新しい生活になり，緊張の連続でしたね。ゴールデンウィークに家庭で心身ともにリフレッシュできるといいですね。

５月５日は日本では「こどもの日」，５月１５日は国連が定める「国際家族デー(International Day of Families)」です。今回は，家族について考えてみたいと思います。

「国際家族デー」は，１９９３年に国連総会で制定されたもので，各国において家族に関する問題についての認識と理解を深め，その問題に取り組む能力を高めるとともに，解決に向けての活動を促すことを目的とされています。そこで，日本あるいは世界に目を向けてみましょう。国や社会によって，家族は様々な形や機能をもっています。２０１６年の国連事務総長からのメッセージの中にこんな言葉がありました。「多くの社会では，女性と女児が家庭内での暴力や差別に苦しんでおり，そのことが生涯にわたり，健康と福祉に深刻な影響を与えている」と。日本でも，虐待やヤングケアラーについてのニュースをよく耳にしますが，なかなか解決することが難しい問題です。また，女性が家庭から外出できなかったり，女の子が学校に通わせてもらえなかったりする国もあり，これも解決のために様々な機関で議論されています。

みなさんも知っている「SDGs(Sustainable Development Goals)」(持続可能な開発目標)の５番目は，「ジェンダー平等を実現しよう」という目標です。日本では性別に関係なく誰もが平等に教育を受ける権利を憲法で保障されていますが，世界単位でみてみると，６歳から１１歳までの子どものうち，一生学校に通うことができない女の子は男の子の約２倍だそうです。

話は変わりますが，私自身と家族の関わりについて考えてみると，私にとっての家族は「私が私であること」の大切な土台です。家族の存在があるから頑張ることができると日々思います。でも，自分が疲れでイライラしたり，娘たちの言動に腹を立てたりして，感情的になって心ない言葉を発してしまうこともあります。家族の中の平和を考え行動に移すことは，もしかすると社会の平和，世界の平和をめざす一歩になるのもしれません。

どんなことも大きな視野で見ると，実現不可能な感覚に陥ってしまいがちです。まずは自分たちの基盤である自分の家族に対して，理解を示し，お互いを大切にすることから始めてみませんか。

法務大臣賞　「弟が教えてくれたこと」

熊本県天草市立本渡中学校１年　松本　華英（まつもと　はな）

私は，父，母，妹，弟の５人家族です。その中の弟は，ダウン症候群という障害をもっています。

ダウン症とは，約８００人から１０００人に１人の割合で生まれて，普通は，４６本の染色体があります。ダウン症の方は，４７本あり，一般的に発達はゆっくりで個人差があるそうです。

私の弟は，私が５歳の時に生まれました。生まれてすぐ救急車で熊本の病院へ運ばれて行ったのを１３歳の今の私でも覚えています。すごく肌が真っ白で，生まれた時泣き声も聞こえず，すごく心配で

した。私は弟とも会えず何もしてあげられなく辛かったです。

しかし，幸いなことに心臓の手術は成功しました。入院中，弟の病院へ行くことはできても，直接弟と会うことはできませんでした。決められた時間にガラス越しに見える弟の姿に，ショックで言葉も出ませんでした。鼻や胸などチューブが体中に入れられている状態でした。なぜこんな小さな男の子がこんな目に遭わなければいけないのかその頃私にはよく理解できませんでした。

そして３か月後，弟は退院し，１歳半になると手話ができるようになり，手を使って自分の思いを伝えるようになりました。２歳になると歩けるようにもなりました。自分のペースで頑張っている弟が私に元気や希望をたくさん与えてくれました。

１２歳の頃，私は２つの記事を見ました。それは私にとってとても衝撃的なものでした。その記事の内容は，新出生前診断についてです。日本で２０１３年に取り入れられたもので，お腹の中にいる赤ちゃんが障害等を持っているのか調べる診断でその検査は９９％正確な結果が出るというものでした。そこで約８００人が異常があるという理由で赤ちゃんを中絶したそうです。

また，もう１つの記事には，アイスランドでダウン症の子供が生まれてこない社会を目指しているという記事です。なぜそんな社会にしていきたいのか全く理解できません。

私の家族にとっては，弟が生まれて良いことばかりが起こったと感じています。例えば，私はスポーツなどで勝つのが一番大事だと思っていました。しかし弟を見て，みんなと一緒にスポーツを楽しみ，大会に喜んで参加している姿やマラソンで最下位であっても周りで応援している人に笑顔で手を振っている姿を見て，スポーツの目的は，決して優勝することではないと，考えさせられました。

母は，弟を産んでいろいろな人と出会いほかの人の気持ちがよくわかるようになり，弟のおかげで母もたくさん学ぶことができていてとても感謝しているそうです。

父は，弟の誕生をきっかけに，障害をもつ人が社会に参加できる事業を立ち上げました。やりがいのある実りある仕事が今できているのは弟のおかげだと話しています。

このように，私の弟は私たちの家族にはなくてはならない存在です。ダウン症の人がいない社会を目指すのは大間違いです。ダウン症の方は，多くの人たちと同じで様々な性格の方がいますが，私のであったダウン症の方は，ほとんどの方が人付き合いがうまく，陽気で思いやりのある人が多いです。どんなに勉強やスポーツが苦手であっても，どんなに成長するのが遅くてもダウン症の人は周りの人をとても幸せにしてくれます。私の弟もそうです。そういう人が，この社会には，とても重要だと思います。

しかし残念ながら，ダウン症の人は社会の一部から見ると価値のない人間だと思われています。そのような見方をする人は，完璧な人間を目指しているのでしょうか。私は，人が完璧でないという理由で命を奪う社会はとても恐ろしいと思います。そうなるのであればお腹の中の赤ちゃんにちょっとした異変があれば社会は中絶を勧めるのでしょうか。これからの未来がすごく心配です。

世の中には，いろいろな人がいるからこそそれぞれが個性を出し合うことで社会が明るくなり，人や国が豊かになると思います。

ある時，母が私にある事を聞きました。「もし，弟からダウン症という障害を取る事ができるのであれば取りたい？」と。その時，私は絶対に取ってほしくないと思いました。今の弟が，私の大切な弟だからです。成長が遅くても，発音が完璧でなくても，スポーツがそんなにうまくなくても，私の明るい，面白い弟は，私にとっては，そのままで完璧な弟なのです。

平成３０年度　全国中学生人権作文コンテストより